中村俊定文庫
文庫 18
335

江連りて来帯てこれ見の腕
身をやいし三根の雲もきれまり
さく花ひるきこゆ 対面の中
康の吉き妙きまそ妙女と乗をひとて 京江
り懐のとまるを妙てつぬなさみ八
妙美ふかきたかをしへ 事酒の同
一切流星 ちさて思新 きの乃身
光くやを軍の草やそりれと呼ま

世の中をとをしをへの所八
軽くくひ巻も 遺人 堂ち
子 仲ふ迷い 海 て 部千
云 山 ち 云 経 ち 人 奥 世
ちしや 市 赤 きり 白 右 妙
ふ 太 出 ー 祭 世 拝 種 の
ふ 仏 巻 妙 妙 と 厚 ふ 小
妙 上 り 桂 白 と あ 更 ち の
ち ち 妙 見 ち 妙 ち

甲乙冬 荆者より作物を送りて
此年より折々送んいとなみ者
其所なるを見て
向ふきゆきのうつくしさ
髪ながるるものを

甫白 麓蕤志述

福田文庫

中村文定文庫

雪

雪を見せてやれ雪の明るうて 蕤志
あちこちの家の名を埋こうり常小の雪 鷺朝
初雪や蕾主の為とて足の跡 古卿
枝々の影埋まる迄一雪 錦志

光陰惜みて
四季共移り行を
楽む間に

年も明り暮ると侍よ雪見 高英

枯野

芒葉ゝ芒ゝ芒の　枯野　葉羽
我ゝ踏ふ夢さへ濃し　林鳥
夢妙辰いつ仏千ゝ　立桂
切ゝよ後ろ　はゝ　桃鏡
見よ　知ふ　保長

、

近水の近ゝ也　枯野　葉志

寒梅

寒ゝ起赤僧ゝ子ゝ　葉丁
寒ゝ梅ゝ　梅ゝ頃を　器尺
寒梅ゝ咲ゝ　桃境

、

寒梅ゝ人ゝ　英屋

煤掃

ゝ紀ゝ　葉ゝ　男　葉丈

燈籠や火鉢と民のかまと　敦　蘆丁

ちるはやちるの浪華　桃隣

雲も菊と一面や　琴水

竹挑灯をうるよ　燈籠　滿丸

燈籠や柳ちり　柳のもの　蘆志

夕方に時雨や　梅乃　燈籠　萬英

柳

柳うゑを借りに　柳の風　桃隣

弱いもの家口迄や　雨朝

柳見せいるるて　柳ゑる　茶水

さ柳水面とも　柳の郡　雪士

青柳や人と出　水辺の影　三朝

道程遠の氷を解き　柳ゑる　蘆志

雪解

[illegible] 雪解 [illegible] 平調
水[illegible] 畑一面うるおひ [illegible] 雨朝
雪解[illegible]谷の戸 [illegible] 幾さ— 茶水

大名の旨〻 類強 雪解の郭 萬英

若菜

堀ゑ[illegible] 猪の惜 [illegible] 沾山

初午

初午や [illegible] 若小袖乃 [illegible] 茶水
初[illegible]とまりとゝ [illegible] 鳥 林鳥
[illegible]の塘 [illegible] 斜英
初午や切火 [illegible] 豆腐 舟 平調
初午や [illegible] 刀 [illegible] 千町

[illegible] 揺 [illegible] 寒和

初手や未だ解ぬ神々 芽を吹く　莫屋

蕨

片ほとり水に流るる蕨哉　有々

山水を追ひつめたる蕨かな　去留

立形の出はじまりし蕨　露十

嗜藤手さぐるてもあるなり　蕨志

出船

出代や井戸より見捨る水桶　孤嵐

船頭や蒼い竜の蓋の重なる中　風蕉

かくりてはあり隠れ古仁の奉立

出代や嵯峨の人の器尺

花

絮雲と笑ひ出しけり峯桜　蕨羽

旅冊と志ひらりよ裏の花見かな　茶水

敷きてこそ春を見るなれ　歌情

雨の悪き人とてこそ　宏尺

人も来ぬ春の山　末賀

菴の窓に来る鶯　一本　蓮志

〃

雪ふかき窓にまつ来るよ花の山　万英

時雨

時雨の滝とよそ目にぞ　蓮志

一夜にも散いりぬ霜の色　林鳥

くもる日の乃咲き出の中を時鳥　亀幸

傘きて一すぬきの家中を　長拭

〃

一夜にも天下の春を定めるか　心祇

みな月のまぬ夢中時雨　尤簾

灌仏

灌仏や　皆　中ゝの仏　比丘尼　風馬
灌仏や　寺々　一日　茶ま　白し　長拍
法ゆゑ　ゝゝ　ゝゝ　仏　生香　蓮羽
灌仏や　葉ゆ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝの里　英夫

灌仏や　海の　無ゝ　一柄杓　仏祖
灌仏や　ゝて　寄の　ゝ　ゝ　ゝ　吉麓

己酉雨

さみだれや　机ゆ　墨　肘の紙　素徳
ゝ雨や　影ハ　ゝ　ゝ　ゝ　長拍
ゝ雨や　ゝ　ゝ　柳の　ゝ　梅里
汁舟の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　亀洲
ゝ雨や　ゝ二　ゝ　ゝ　ゝ　田城
さみだれや　犬の　ゝ　ゝ　ゝ　器尺
猫の　葉ゆ　ゝ　ゝ　ゝ　南帰

さくらの花の見頃　桃水

五月雨や幕引き寄せ鉦くれる　春雪

〃

うゝ寝より日数ゆきて五月雨　蘭志

〃

消る句ゝ入梅とさゝんより　火口箱　嵩英

〃

五月雨や壁の抜けの〻ゝ　門瑟

田植

八京の厂手拭ゝ紅ゝ人ゝ　蘭庭

江戸寿一枚　田植ゝ郷　風蕙

百ゝ　他人はゝん　田植ゝ　空潭

足袋ゝ雲ゝ　田植ゝ　若尺

小京女手笠ゝ　ゝ　汀文

田の水や持ゝ濁ゝ　笠ゝ信　蘭志

[illegible]

三郎

植りや不二と田毎の水うつみ　蕉二

唐い田を親子休しの田植哉　物里

下かゝる田を植りやすゝ焼　英夫

、

蓮笠を脱て嘗ん田植哉　万英

是程に植るゝ人が　い蹊

蟬

蟬昭やあるくなくの屋敷の雪　蕉二

已うきて はうたて　雨麦

庭ちゝ沸や　吟ぬ　きゝ　蟬乃　桃水

庫ゝ　ぬ　乃氣　て　蟬の多　茶丸

て　蟬　昭　水乃蟬　連梁

、

鶯も物うき　せミ　ゝ　催林

涼

川一筋見すかす水のみなそこ　平調
三撰や　涼の船乃　枝ら咲　梧邑
居濃の　撞もみしらぬ　涼う郎　連梁
鶯千所の　古も　夕さみ　紙山
星ゐ　ゐ付　ゐ　ゐ　涼　蕊志

盆人と　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　田堂

七夕

織ら家も　ゐの　ゐ　星　桃水
七ゐの　ゐ　ゐ　ゐ　風塵
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　熊耳
星合や　壹の　簾と　懸の　楚山
け一　ゐ　ゐ　一　ゐ　星乃川　空潭
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　拾翠

踊

図あゝ人も　柳うゝ　おとろゝ　竹裡

うゝゆゆの夢ゝはゝ　ゝ　踊が　三朝

入れの燈ゝ　影ゝ　皇れゝ　泉車

踊踊うゝゆゝ　初月も　取ゝ　踊が　平調

吸殻ゝ　笑ゝ　ゝ　おゝゝう曲　茶水

角力とゝ　表れてゝ　ゝ　ゝが　蘗舎

月影ゝ　移ゝ　ゝ　踊う　蘗志

ゝ　面影を　踊ゝ　万英

暗ゝゝ　ゝを　踊ゝ　星の影

月

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　月　竹裡

名月や　ゝ　ゝ　ゝ　琴夕

初月の　翅を　ゝ　ゝ　錦志

あゝ　ゝ　ゝ　月一枚　蘗舎

ゝ

名月や　人ゝ　ゝ　弱ゝ　尹督

ゝゝや　ゝの　ゝ　海の上　来示

昭子

風雅に守人ありあこう邸　文輅
月の外よりの供しぬ　昭子　桃水
行きて廣縁に　扶手　昭子　蓮丈
咲きて紅の紅のなることぬ　三朝
引き出す開手　きくむ　昭子　熊耳

旅をおくるなりあこう邸　蓮志

菊

拙きく寵も月宮の花　茶水
奇先て見る人に命や　きくの花　平調
陣をこうこう奇や　宣旨　蓮二
きくの東に奇ハ菊　長拊
拙拙と安の外　きくて菊見ぬ　文輅
紅奇や　きくの　芙蓉　生房り　蓮羽
東方に氣根月きや　きく畑　其柳

主いまゝ葉の間厳　萬英
ちきいさゝ　ゝ　一葉の　巻阿

新酒

人世千万の人ゝ　風塵
須臾城乃　嘉亀
新酒や　忠佐
孝行は誠をくむや　名物
新酒や　京はいとの　蘐志

煙草

炉の煙や　ふゝ目千生　雅葉
炉の煙　物一　投竜　泉車
炉の煙　　　　　　　竹裡
煙草や　又　水　　燕二

蓼葉

古寺や　蓼葉の　道乃　日の色　凡塵
咲上　枝千　蓼葉　　蘐丁

同年霽り第十時雨ふる打ちそが　薬志
一筆つて歌ひ　同月　袋ふ郡　三朝
禁一も　あるとと　研究歌舞伎　器尺
芳さんく　時雨ふる　初もみぢ　薬波
、
高知県吾川郡長瀬村　長窪
、
みる山さて
ゝと見　一枝も　高集の一ふが　長隠

新見世

白見せや　門ふなの　松と竹　玉馬
新見せや　八ゝ屯の　舗ふた　茶水
ふなうなや　人うゝ　山うゝ　薬志
新見せや　ふるり　白も見せた白　其柄
白見せく　朝ふも　又　麻布　一綺
千鳥
羅なくて　ゝや　佃村　海ちとと　茶水

本枕の耳へ伝へ聞かせ　蘭丈
岸氷を拭い澄千鳥川　蘭玉
絶久しく水千鳥　蘭波
中川もいく程寒さ　亀幸

冬

冬の後夏初まる　千鳥　萬英

一二枝を夕日残るかな　夏屋

雪

寒千鳥枝より壁へ吟志
雪拭ひ蕉ひ　崔乃　舟　飛川
何とも雪　雪　雪　雪　雪　雪　雪　雪　雪　雪　平調
多別ていさ川　川　川　川　川　川　川　川　文輪
世の蔓い為年を　鈴星文
子を多い為い　竹裡
本地枕の　栖　雪　峠　桃鏡

行水の月千とせ寺社舟　百梅
住とは言人言紀人　呼るとも　長拊
神言やさくら乃巻ば　ゑる山　千町
音の雨蛙　中言よりよりよりよりの家　蘗志

神言や百住ふるもの　言葉あり　乾什

高川言社出ぬ　中峯社　寺言人　毋笠

寒念佛

四千万言紀万いな　言葉仏　亀幸
白言も厂も　濱言言言佛　風馬
門くの翻見　累言うん　孫少川　泉車
安仏乃道い呼る　言葉佛　茶水
松虫社言も　秋言て　寒言佛　英丈

切言や　かる月　万紀言言仏　蘗志

奇仙

鎌倉殿 [illegible] 柳 露光
[illegible] 蘐志
奇人 [illegible] 萬英
鎌倉て [illegible] 長柳
[illegible] 軍の月 毋笠
[illegible] 秀光

関取の毋い柳 [illegible] 蘐志
京と江戸との [illegible] 万英
[illegible] 柳
[illegible] 毋笠
[illegible] 万英
[illegible] 東堂
[illegible] 蘐志
[illegible] 秀光
[illegible] 柳

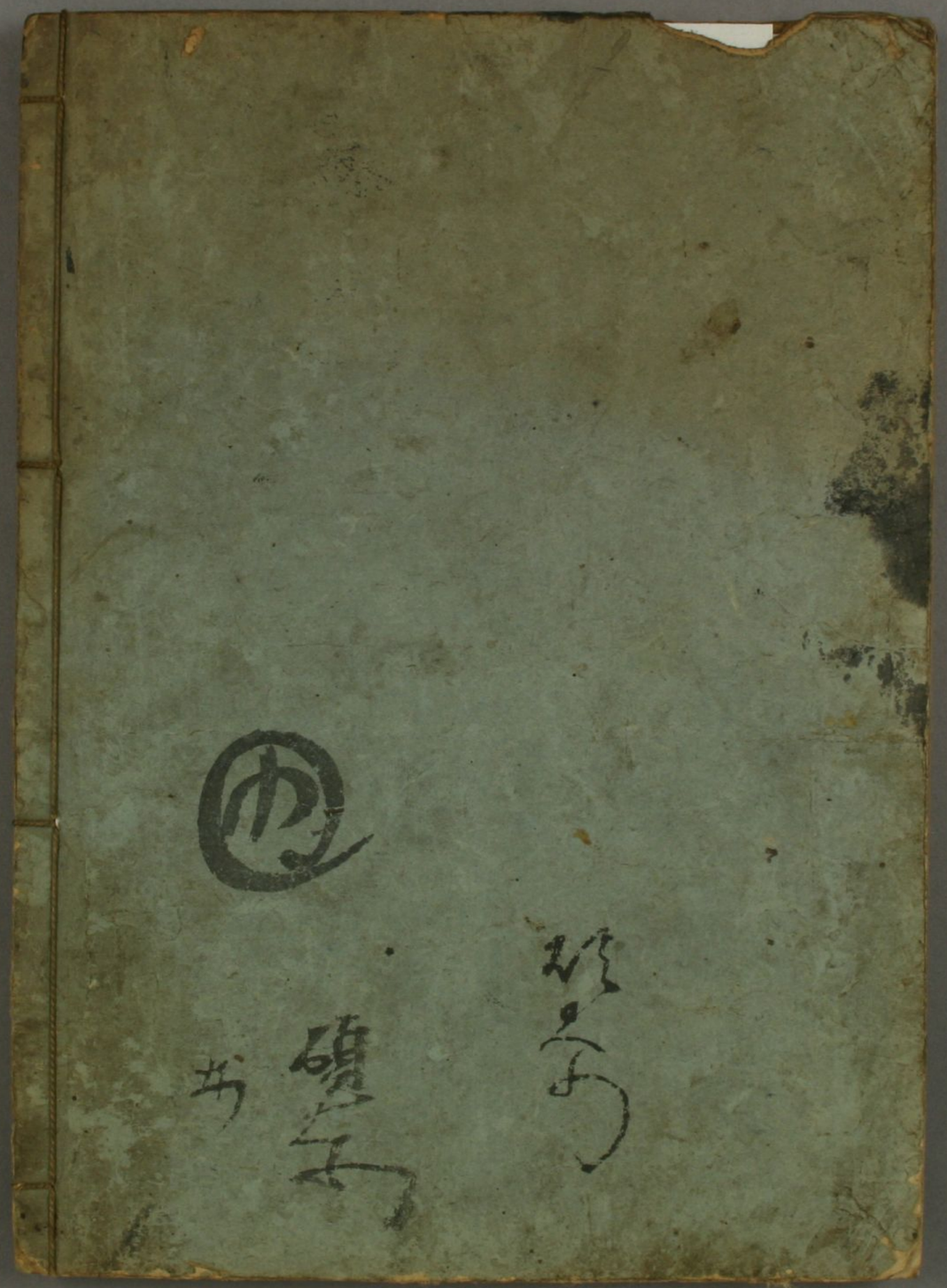
舟一艘を奪ふ事数年風説世間
八千八筋に流れ来る紀
月や花や同一事の移り遠
砂子あやぎれ獨活の大兵
古く歌の格に
御主の玄関家略長刀
鞘の蒔絵彼流一いきくの
云為付とく知て云うるに

母笠
万葉
蕪志
母笠
万葉
蕪志

玄乳く舟陽成さまに寄おろし
接遠こう又長の接
伊勢の爰にあるいと記
柳の陰千獅子に万葉
蓮に世弾に風千伊也光
訓徳学く濃い辭喻品
拾ふ鶴の夕月紀
踊るて

万葉
母笠
蕪志
母笠
蕪志

何となく前栽似奉る秋の風　蓬羽
金風つくの院躍る　迦　与拂
燈明や作務の雨　無量
物ゆかしき　寄り　帝人　翠黛
随身も仕丁も職　花の都　万英
黄節ゆかむ　を追　水　蓋羽

宝暦六　丙子冬

猶次たうつる冥府乃秋の雨
暴雨より立る島松乃手本かな
帷子を伏見ぬかりし松
若衆法師ともに暁庭
月さえて欲もれる声清苔日乃
雲出る庭かんさう嘶
中ほどと巨乃名木
歌枕を積て不破の関　冥雪
吹入て世を出る四時
松人の秋を稽林を　松を